



Title	ブラジルのユダヤ人：モアシル・スクリアル作「偽メシアのバラード」と「老マルクス」（試訳）
Author(s)	スクリアル, モアシル; 平田, 恵津子
Citation	ブラジル研究. 2015, 11, p. 79-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106547
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブラジルのユダヤ人

ー モアシル・スクリアル作「偽メシアの バラード」と「老マルクス」(試訳)

平田 恵津子

はじめに¹

本稿では、ブラジルのユダヤ系作家モアシル・スクリアル (Moacyr Scliar) の代表的短篇小説2篇「偽メシアのバラード (A balada do falso Messias)」と「老マルクス (O velho Marx)」を訳出する。

モアシル・スクリアルは、1937年3月23日、ブラジル南部のポルト・アレグレ市で生まれた。両親はロシアのベッサラビア出身のユダヤ人で、1904年、ブラジルへ移住した。「移民の子」としてブラジルで生まれたことは、ユダヤ系であることと同様、スクリアルの創作活動に大きな影響を与えた。母親によって名づけられた名前「モアシル」は、ブラジルのロマン主義文学を代表する国民的作家ジョゼ・デ・アレンカルの小説『イラセマ』に登場するヒロインのインディオ娘と白人戦士のあいだに生まれる男の子の名前からとられている。作品中、民族融合のシンボルとして誕生する子どもと同一の名前は、ブラジル文学、ひいてはブラジル文化のなかに「ユダヤ性」ーユダヤ民族の豊かな歴史、文化、想像力を織り込もうと試みたスクリアルの作家としての

意義を象徴しているかのようである。

スクリアルは、1962 年、医学生としての体験をもとに書いた短篇集 *Histórias de médico em formação* (『研修医の物語』) で作家としてデビューした。同年、リオ・グランデ・ド・スル連邦大学で医学博士号を取得し、公衆衛生医師としてのキャリアもスタートさせている。医師として州政府保健局で働きながら、作家としても活発な創作活動を行ない、長篇・短篇小説、児童・青少年向け小説、エッセー、新聞・雑誌の社説・論説など様々なジャンルで多数の作品を世に出した。2003 年、権威あるブラジル文学アカデミーの会員に選出され、現代ブラジル文学を代表する作家としての地位を名実ともに確固たるものにするが、2011 年 2 月 27 日、73 歳でこの世を去った。彼の作品は英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語、スウェーデン語、ポーランド語など数多くの言語に翻訳されている。

多民族国家でありながら、ブラジルの中央文壇は伝統的にヨーロッパ中心主義的価値観に支配されてきた。その中にあって、スクリアルは少数民族民族の視点から作品を創作し、かつ、その価値を認められた稀有な作家である。彼はしばしば作品において、ユダヤの歴史とブラジルのそれを自在に交差させる。ここで訳出するふたつの作品でも、シャブタイ・ツヴィ (1626-1676)、ガザのナタン (1643-1680)、カール・マルクス (1818-1883) など、世界の歴史に名を残したユダヤ人たちが時間と空間を超えて、20 世紀初頭のブラジル南部に登場する。ユダヤ系ブラジル人のアイデンティティー問題に正面から取り組んだこれらの作品の底流には、自らの民族的アイデンティティーに折り合いをつけようとする作家の思いが垣間見える。

「偽メシアのバラード」

男がグラスにワインをそそぐ。その手は今やしわだらけでふるえている。だが、大きくてごつごつした彼の手は未だに私に感銘を与える。私はそれを

自分の手と比べる。私の太くて短い指と。そして、私がかつて彼のことを一度も理解できなかったことを、今後も決して理解することはできないであろうことを認める。

ゼムリア号の船上で、私ははじめて彼に出会った。私たちユダヤ人は、その古い船に乗ってロシアを離れようとしていた。ポグロム²を恐れてのことであつた。アメリカの明るい未来が手招きしていたので、私たちは3等船室にすし詰め状態でそこへ向かつて旅していた。あの1906年、私たちは泣きながら、吐いていた。

私たちが乗船する前から、彼らはそこにいた。シャブタイ・ツヴィとガザのナタン。私たちは彼らのことを避けていた。彼らがユダヤ人であることはわかってはいたが、私たちロシア出身者は疑い深い質なのだ。自分たちより東洋風の者たちを好きにはなれない。シャブタイ・ツヴィは小アジアのスミルナ³出身だった。彼の褐色の肌と黒い瞳がそれを裏づけていた。船長が私たちに語ったところによると、彼はとても裕福な家の出らしい。事実、彼とガザのナタンは、その船で唯一まともな船室を占領していた。では、なぜ彼らはアメリカに向かつていたのだろうか？なぜ逃げていたのだろうか？答えが出ない質問だった。

ガザのナタンは小麦色の肌をした小男で、とりわけ私たちの好奇心をそそった。私たちはそれまでエレッツ・イスラエルのパレスチナ出身のユダヤ人を見たことがなかったのである。私たちの多くにとって、そこは夢の中にだけ存在する土地だった。ナタンは雄弁家で、熱心に耳を傾ける聴衆に向かつて、ガリラヤのゆるやかな丘や、美しいキネレト湖や、彼の生まれ故郷で、サムソンがその門の扉を破壊した歴史的な町ガザについて話をした。だが、酔っぱらうと、故郷を罵っていた。「石ころに砂、らくだに、^{ぬすつと}盗人のアラブ人たち…」船がカナリア諸島から遠ざかっていたとき、エレッツ・イスラエルの悪口を言っていた彼の前に、突然シャブタイ・ツヴィが現われた。そして、彼が血を流しながら、床に倒れこむまで殴り続けた。ナタンが敢然と抗議する

と、とどめの足げりで叩きのめした。

その後、シャブタイ・ツヴィは、誰とも話をする事なく、何日も船室に閉じこもって過ごした。そばを通ると、うめき声や…ため息…そして、優しい歌が聞こえてきた。

ある日の明け方、私たちは船員たちの叫び声で目を覚ました。甲板へ走っていくと、なんとシャブタイ・ツヴィが凍るような海で泳いでいた。船員たちがボートを下ろし、やっとのことで彼を海から引き上げた。彼は真っ裸だったが、そのまま私たちに目もくれずに、顔を上げて、そばを通り過ぎた。そして船室に閉じこもった。ガザのナタンは、水浴は苦行だと言ったが、私たちの結論は違っていた。「狂ってる、あのトルコ人は」

リオ・デ・ジャネイロのフローレス諸島に到着すると、私たちはエレシ^ンへと旅を続けた。そこから先は屋根付きの大きな牛車に乗せられ、私たちの移住を援助したオーストリア人博愛主義者に敬意を表して名づけられた開拓地「バロン・フランク」の新しいわが家へと連れて来られた。私たちはこの男にとっても感謝していたが、知り合うことはなかった。私たちが割り振られた土地にはいずれ鉄道が敷かれることになっていて、男爵^{バロン}はその株価が上がり上がることに関心があったのだと言う者もいた。私は信じない。彼は単に善い人なのだ。すべての家族に土地と木の家と農具と家畜をくれたのだから。

シャブタイ・ツヴィとガザのナタンは私たちとずっと一緒だった。男爵^{バロン}の代理人にとって、ふたりの男が同じ屋根の下にいるなど想像することさえ不愉快だったが、1軒の家が彼らに与えられた。

「我われが必要としているのは家族なんだ」代理人はきっぱりと言った。「おかしい人間なんかじゃない」。

シャブタイ・ツヴィが彼をじっと見つめた。そのまなざしの強さに、私たちは凍りついた。

男爵^{バロン}の代理人は身震いすると、私たちに別れを告げて、足早に立ち去った。それから私たちは無我夢中で仕事に打ち込んだ。

田舎の生活は何と辛いことか！木を倒し、土地を耕し、種をまいて… 私た

ちの手は血豆だらけだった。

私たちは何カ月間もシャブタイ・ツヴィを目にしなかった。彼は家に閉じこもっていたのである。金が底をついたのは明らかだった。なぜならガザのナタンが衣類や食べ物を乞いながら、村中を歩き回っていたからだ。彼は、まもなくシャブタイ・ツヴィが復活して、村中の人びとに良い知らせをもたらすだろうと予言していた。

「それにしても、あの男は一体何をしているんだ？」私たちは尋ねた。

何をしてるかだって？研究だよ。ユダヤ教神秘主義の最高傑作『カバラ』の「創造の書」、「光明の書」、「光輝の書」を研究しているのさ。オカルティズム。靈魂の再生。悪魔学。名前の力（名前は悪魔を追いはらう。名前の力を心得た者は足をぬらさずに水の上を歩くことができる。言葉で言い表せず、口に出すこともできない神の秘密の名前の力については言うまでもない）。文字と数字の神秘学（文字は数字で、数字は文字で、数字は不思議な力を持っていて、文字は英知へのステップだ）。

そんなとき、バロン・フランクに盗賊のシコ・ディアボが現われた。獐猛な子分たちを従えて、国境付近からやって来たのである。「つば広」⁵たちから逃げ、この開拓地付近に潜んでいた。そして、盗み、壊し、あざ笑っていた。笑いながら、私たちの雄牛を殺し、その睾丸を引きちぎり、軽くあぶって食べていた。そして、もし私たちが当局に訴えようとすれば、皆殺しにすると脅していた。この災難だけでは足りないかのように、雹が降り、小麦畑に壊滅的な打撃を与えた。

私たちがかつてないほど深い絶望に沈んでいるとき、シャブタイ・ツヴィが姿を現わした。

彼はすっかり変貌していた。断食がそのたくましい身体を無残に変え、肩はげっそり落ちていた。異様に灰色がかった彼の髭は、今では、胸の中ほどまで伸びていた。神聖さが彼を包み込み、その瞳の中で輝いていた。

彼はゆっくりと表通りの端まで歩いて行った… 私たちは鉄製の農具を放り出し、家を飛び出し、そして、彼につき従った。

シャブタイ・ツヴィは土が盛り上がって小高くなったところに立ち、私たちに言った。

「汝らに天罰が下される！」

シコ・ディアボと雹のことをほめかしていた。私たちは神の怒りを買ってしまったのだ。罪をあがなうために、私たちに何ができるだろうか？

「家、畑、学校、シナゴグ、我われはすべてを捨てねばならない。そして我われ自身の手で造るのだ、1隻の船を。家の木材で船体を、祈りのショールで帆を。我われは海を渡るのだ。エレッツ・イスラエルへ、パレスチナへ行くのだ。聖なる^{いにしえ}古の都ツファットに巨大な神殿を建てるのだ」

「そして向こうでメシアの到来を待つのですか？」ふるえる声で誰かが聞いた。

「メシアはもうやって来た！」ガザのナタンが叫んだ。「メシアはここにいる。メシアは我らがシャブタイ・ツヴィだ！」

シャブタイ・ツヴィは、からだを覆っていたマントを広げた。私たちはぎょっとして後ずさりした。目の前には傷だらけの裸のからだがあった。腹には、釘を逆さに立てた幅広のベルトが巻かれていて、釘の先端は体内に埋まっていた。

その日から私たちは働くのをやめた。雹が作物を台無しにしようが構わない。シコ・ディアボが家畜を盗もうが構わない。なぜなら私たちはここを出て行くのだから。歓喜に酔いしれながら、私たちは家を破壊した。女たちは帆をつくるために布を縫った。子どもたちは保存食をつくるために野生の果実を摘んだ。噂によるとガザのナタンは、聖地を支配しているトルコ人権力者たちにわいろを贈るため、金を集めていた。

「ユダヤ人たちに一体何があったんだ？」付近の開拓者たちはいぶかった。あまりに不審に思ったので、彼らはバティステラ神父に探ってもらうよう頼んだ。神父は私たちに会いに来た。彼は私たちが苦勞していることを知っていて、救いの手を差し伸べるつもりだった。

「必要ありませんよ、神父さま」私たちは包み隠さずに答えた。「私たちの

メシアが到来したのです。彼が私たちを解放し、幸せにしてくれるでしょう」

「メシアだって？」神父は驚いていた。「メシアはすでにこの世を通り過ぎていった。それは我らが主、イエス・キリストだ。彼は水をワインに変え、私たちの罪のために十字架にかけられて死んだのだ」

「お黙り！」サリタが叫んだ。「メシアはシャブタイ・ツヴィよ！」

太ったレイブ・ルビンの養女のサリタは、ポグロムで両親を失っていた。そのとき彼女は心を病んでしまった。自分が運命によって定められた救世主の妻であると信じ、シャブタイ・ツヴィにどこへでもついて回った。驚いたことに、シャブタイ・ツヴィは彼女を受け入れ、船体が完成した日にふたりは結婚した。船の方は、立派なできあがりだった。私たちは、ベント・ゴンサルヴェス⁶が船を大きな荷車に乗せ、雄牛に引かせて運んだように、船を海まで持って行こうと考えていた。

牛はもうほとんど残っていなかった。今ではシコ・ディアボが毎週のように現われ、そのたびに牛を1頭か2頭、盗んでいったからだ。奴らに立ち向かおう、と言う者もいた。シャブタイ・ツヴィはその考えを認めようとしなかった。「我われの王国は海の向こうにある。それに、神が我われを見守っていてくださる。きっと何とかしてくださるだろう」

実際に、シコ・ディアボが消えた。私たちは安心して働くことができ、2週間で出発のための準備を完了させた。そうして、ある土曜日の朝、馬に乗った男がギャロップで村にやって来た。それは、シコ・ディアボの補佐のグメルシンドだった。

「シコ・ディアボが病気だ！」彼は馬に乗ったままで叫んだ。「かなり悪い。医者ではどうにもならない。シコ・ディアボは、病気を治すために、お前たちの聖人を連れてくるよう私に命じた」

私たちは黙ったまま彼を取り囲んだ。

「もしその男が来なければ、村中を焼きつくすだけのことだ。わかったか？」とグメルシンドは続けた。

「行こうではないか」力強い声が響いた。

それはシャブタイ・ツヴィだった。私たちは彼のために道をあけた。彼はゆっくりと近づいてきて、盗賊と向かい合った。

「降りろ」

グメルシンドが馬から降りると、シャブタイ・ツヴィがそれに乗った。

「おまえが先を行け、走るんだ」

三人の行列だった。先頭は走るグメルシンド、その次に馬上のシャブタイ・ツヴィ、最後尾にはロバにまたがったガザのナタン。サティラも行きたがったが、レイブ・ルビンが許さなかった。

私たちは学校に集まり、一日中そこで過ごした。何もしゃべらなかった。私たちの不安はあまりにも大きかった。夜になって、ひづめの音が聞こえたので、私たちはドアへと走った。それは息を切らしたガザのナタンだった。

ナタンが話した。「我われが向こうに着くと、シコ・ディアボが地面に横たわっていた。彼のすぐ近くで、治療師^{ヒール}が魔術を行っていた。シャブタイ・ツヴィは盗賊のそばに腰を下ろした。何も言わず、何もせず、そいつに触れることもなかった。ただ見つめていた。シコ・ディアボは頭を上げ、シャブタイ・ツヴィを見ると、短く叫び、死んでしまった。治療師^{ヒール}は、その場で手下たちに殺された。シャブタイ・ツヴィがどうなったかはわからない。私は知らせに戻って来た。急げ、逃げるんだ！

私たちはあわてて荷車に乗り、エレシンへ逃げた。サティラは、無理やり連れて行かなければならなかった。

翌日、レイブ・ルビンが私たちを集めた。

「おまえたちがどうするつもりなのかは知らん。だが、おれはこんなばかげた話にはもううんざりだ。バロン・フランクやら、パレスチナやら、ツファットやら…おれはポルト・アレグレへ行く。お前たちも一緒に行くか？」と言った。

「シャブタイ・ツヴィは？」ふるえ声でガザのナタンが尋ねた。(彼は良心の呵責を感じていた)

「あんな奴、地獄にでも落ちるがいいさ！」レイブ・ルビンはどなった。「災

難ばかり持ってきやがって！」

「お父さん、そんな風に言わないで！」サティラが叫んだ。「彼はメシアなのよ」

「何がメシアだ！そんな話はやめにしろ。反ユダヤ主義者を刺激するだけだ。おまえは神父の話を聞かなかったのか？メシアはもう来たんだ。いいか？その男は水をワインに変えたし、ほかにもいろいろとやった。そして、私たちは出ていく。おまえの夫がまだ生きていて、正気になれば、後から来ればいい。おれにはおまえの面倒を見る義務がある。夫がいようと、いまいと、おれがおまえの面倒を見るんだ！」

私たちはポルト・アレグレへ向かった。親切なユダヤ人たちが私たちを受け入れてくれた。数日後、驚いたことに、シャブタイ・ツヴィが姿を現わした。シコ・ディアボの一味を捕らえた「つば広」たちが彼を連れてきたのである。

兵士のひとりが語ったところによると、シャブタイ・ツヴィは石の上にすわって、シコ・ディアボの死体をながめていたそうだ。地面のあちこちに酔っぱらった盗賊たちが寝っ転がって、いびきをかいていたらしい。あたりには解体された雄牛の肉が散らばっていたそうだ。そしてワインも。「あんなに大量のワインを見たことがない！」前は水が入っていたのに、ワインにかわっていたんだ！びん、水筒、バケツ、たらいに大だる。近くにあった水たまりまで赤くなっていた。牛の血だったのか、ワインだったのかはわからない。でも、ワインだったと思う。

レイブ・ルビンは、金持ちの親戚に援助してもらって、布地の店を構えた。それから不動産業へ商売替えし、後には金融会社を設立し、巨万の富を築いた。彼の会社のひとつで、シャブタイ・ツヴィは働いている。私も同じ会社の社員だ。ガザのナタンは密輸にかかわり、逃げるしかなかった。その後、彼の姿を見たものはいない。

サティラが死んで、シャブタイ・ツヴィと私はバーで会って、ワインを飲

むようになった。私たちはそこで一晩中過ごす。彼はあまり話をしない。私も同じだ。彼がワインを注ぎ、私たちは黙ってそれを飲む。12 時に近づくと、彼は目を閉じ、グラスの上に手をかざし、ヘブライ語（あるいはアラム語かラディノ語）で何かつぶやく。ワインは水に変わる。バーの主人はただのトリックだと思っている。私はまゆつば物だと思っている。

(終り)

「老マルクス」

前世紀の終わり頃、マルクスは本当に疲れていた。政治闘争は彼のエネルギーを消耗していた。彼は病み、世界的な労働運動のリーダーとしての自分の未来が信じられなくなっていた。できることはすでにやっていた。『資本論』は刊行され、出回っていた。彼の論文は注意深く読まれていた。にもかかわらず、マルクスは病気で、貧しくて、フラストレーションを抱えていた。

「もうたくさんだ」マルクスは言った。「私に残された時間はわずかだ。これからの人生をひっそりと、だが、快適に過ごしたい」

この決意は痛ましいものだった。それは、左足の指が 6 本あったから、ほかの人たちより優れていると考えていた男の話を思い出させる。男があまり吹聴したので、ひとりの友人がそれを見たがった。その 6 本の指を。男は靴と靴下を脱いだが、見てみると、みんなと同じように、5 本の指がついていた。周りの人が笑った。男は家に戻り、がっかりしたまま、寝ることにした。そこでまた靴を脱ぐと、左の足には 4 本の指しかなかった。

マルクスは疲れていたのだ。「私に残された時間を、いい暮らしをして過ごしたい」マルクスの考えは、経験的計算に基づいていた。当時の平均寿命から自分の年齢を引いて、苦悶していたのである。自分に残された時間はあまりないように思っていた。どうしよう？ふざけた冒険に身を任せようか？だ

が、厳格さを哄笑にかえることは正当だろうか？ 薔薇十字団の表現を借りれば、人生を笑いながら「無駄にする」のか？

マルクスには娘がいた。娘たちのためにより良い未来、快適な暮らしを望んでいた…でも、どうやって？

マルクスは、発展していた資本主義の仕組みについて誰よりも熟知していた。生まれつつある工業社会のあらゆる誤りを的確に診断できた。「これらの誤りを調査するのに私より優れている者はいない」と考えていた。富は手の届くところにあった。

だが、決断しようとしなかった。日々はただ過ぎていき、妻に言い訳ばかりしていた。「最良の方法を探っているんだ…いくつか計算をせねばならん…今のところ、やる気になれんのだ…」ずぼらなマルクス！

妻と娘の方では、ふざけている場合ではなかった。もはや着る服もなかった。食事は日に一度だけ、古いパンとジャガイモでとっていた。

ゆえに、マルクスは決断しなくてはならなかった。簡単に手に入る利益についての自分の理論をどこか新しい国で試すことにした。そしてブラジルを選んだ。

今世紀はじめ頃の冬のある朝、マルクスはポルト・アレグレに到着した。船が濃霧のなか桟橋に接岸した。マルクスと娘たちはオレンジ売りのはしけをじっと見ていた。腹をすかせた娘たちは泣いていた。地元の老人が娘のひとりにソーセージをくれた。娘はむさぼるように食べ、満足げに笑った。

「なんと、まあ、腹をすかせた子どもだ！」男は驚いて言った。

「後進国における労働者階級の役割について研究せねばならぬ」とマルクスは考えた。しかしすぐに、そこには理論を練るためではなく、金を稼ぐために来ていることを思い出した。

「さあ行こう」彼は指図した。

一家は旧パンタレアン・テレス通りにある下宿屋に宿をとった。到着してすぐに、さらなる悲劇がマルクス家を襲い、彼らを悲嘆に暮れさせた。と言うのも、ソーセージを食べた末っ子のプンジが激しい腹痛と下痢に見舞われ、

医者を呼ぶ金がなかったマルクスが慈善病院へ連れて行ったものの、その晩、死んでしまったのである。

「もしすぐに連れて来てたら…」当直の研修医が言った。

傷心の妻は夫の方を振り返った。

「あなたのせいよ、いまいまい革命家さん！あなたは人を愛することができない！そこら中に憎しみをまき散らすことしか知らない！階級闘争には酔いしれるけれど、自分の娘たちの苦しみに心を動かされることはない！」

マルクスは後悔し、激しい罵倒に耐えた。

次の日、彼は仕事を探しに出かけた。

そしてカウドゥロ大通りの家具工場に勤め口を見つけた。小さくて、薄暗く、ほこりだらけの場所だった。工場主が食べていくのにさえ十分な収益は上がっていなかった。だが、この工場主、髭面の年寄いたユダヤ人は哲学的な考えをもっていた。

「ひとりが食べられるところでは、ふたり、三人、四人が食べられる。ましてそれがユダヤ人ならなおさらだ。仮にそれがドイツ人だとしてもね」

その工場では、マルクスのほかにネグロ・ケリノと、めがねをかけたニキビ面の若者ヨッセルが働いていた。ネグロ・ケリノは錐、鉋、丸のみ、のみ、槌を自在に操った。研磨機も使いこなし、必要があれば、つや出しもしていた。帯鋸では彼にかなう者はいなかった。

ヨッセルはさまざまな場面で助手をしていた。

彼はマルクスに声をかけた。

「僕たちの仲間になってくれませんか？僕は善良なユダヤ人青年グループです。いつも誰かの家に集まって、いろんなことについて議論しています。いい娘と結婚して、家庭を作りたい、とみんな考えているんです。僕たちのコミュニティーの暮らしをもっと良いものにしたいんです。参加しませんか、カール・マルクスさん？」

マルクスはふたつの理由で断った。ひとつは『ユダヤ人の問題によせて』を書いた後、ユダヤ民族に関する問題については研究し尽くしたと信じてい

たからだ。もうひとつは、彼の目的は裕福になることであって、親しく交わることではなかったからだ。

「誘いを受けるわけにはいかないよ、ヨッセル君。私の目的は人生で成功することだからね。幻想は捨てるよう、君に助言するよ。手遅れになる前に、もっと価値のあることに打ち込みたまえ。君は健康に問題があるじゃないか。結核になって死んでしまうよ」

実際のところ、ユダヤ人のあいだで結核はまれだが、ヨッセルは血を吐くようになって、家庭を築くことなく死んでしまった。老工場主とマルクスとネグロ・ケリノが葬儀に参列した。墓地に、おびえた顔をした青年が数人現われた。ディベートサークルの仲間たちだろうとマルクスは考えた。推測は当たっていた。今やマルクスはほとんど間違いをおかさない。

ある晩、寝る前に、マルクスは左の足に目をやった。

「指が5本」大きな声で言った。「前には4本、いつか6本！」

「何ですって？」妻がまどろみながら尋ねた。

「寝なさい」彼は答えた。

マルクスは景気動向に常に注目していた。新聞、雑誌、本、手に入るものには全て目を通した。ラジオを聴き、街角での会話に耳を傾けた。データを集め、傾向を考察した。

工場主はもうかなり年をとっていた。ある日、マルクスを呼び出した。

「わしはもう年だ。共同経営者が必要だ。君がなってくれないか？」

「私は何も持っていません」

「必要ない。君のユダヤ人としての誠実さを信じるよ。仮に君がドイツ人だったとしてもね」

マルクスは承諾した。それからはふたりでネグロ・ケリノに指図するようになった。ケリノは気にしていなかった。いつも『プレнда・ミーニャ（私の愛しい人）』を歌いながら、材木に釘を打ちつけては、研磨機から帯鋸へ、帯鋸からつや出しへと駆けまわった。

マルクスはゆっくりと、徐々にスピードをあげていくモーターのように働

き出した。彼の前まで、工場のシステムはシンプルだった。客が工場にやって来て、好みの形とサイズで洋服ダンスを注文し、その価格まで決めていた。

握手をして商談が成立すると、工場主も従業員もみんなで洋服ダンスの製作に取りかかっていた。マルクスはこの無秩序型を終わらせた。生産ラインの構築を宣言したのである。だがその前にネグロ・ケリノを解雇した。

「なぜだ？」老工場主は抗議した。「あんなに便利な従業員を！なんでもできるのに！」

「まさしくそれが理由です」マルクスは答えた。「私が望むのは、ひとつのことだけに通ずる人、つまり、専門家です。おわかりですか？丸のみと鉋と帯鋸が使える人、すべてを心得ている人、そんな人たちは私の役には立ちません。おわかりですか？」

「だが、君は家具について何にも知らないではないか！」老工場主はぼう然としていた。

「でも、私は経済を知っています。あなたはゆっくり休んでいてください」

第2次大戦がはじまった。その頃、マルクスはすでに髭を剃っていたが、工場に国旗を掲げた。完璧なポルトガル語を話していたので、誰も彼のことをヨーロッパ人だとは思わなかっただろう。だが、彼が用心するのには理由があった。陸軍に家具を納める契約をしたところだった。自分が外国人であることが知れて、ビジネスに支障が出ることを嫌ったのである。

老工場主は毎日シナゴークで過ごした。

恐ろしい知らせがヨーロッパから届いていた。強制収容所。焼却炉… ある日、朝食のテーブルでマルクスの妻が夫に「あなたが言っていたことは正しかったわ。人類の歴史は何て流血に満ちているのかしら！」と言って、バターをぬった。

チャーチルはイギリス国民に対して、血と汗と涙を流すことを約束していた。マルクスは工場に拡声器を設置させ、愛国的な歌を流し、工員たちに生産性向上を要求していた。「ロンドンには爆撃されている！そこであなたは？一体何をしますか？」彼は広告に金をかけた最初の企業家のひとりだった。こ

のビジネスチャンスをつかむセンスとほかの才能のおかげで彼はたくさんの金を稼いだ。

もちろんそこに至るまで、いつも調子が良かったわけではないし、生やさいいものでもなかった。1941年の洪水は彼を大変な窮地に立たせた。何千もの堅木の板が、泥まじりの水に浮かんで流されていったのだ。マルクスはその突然の出来事を、あきらめの気持ちをもって受け入れた。「人類は自然の力を制御しながら大きくなったのだ」と考えた。

その埋め合わせに、老工場主が洪水で肺炎にかかって死んだ。マルクスは安堵した。老共同経営者の忠告にもはや耐えられなかったのである。それでも、事務所に元共同経営者の肖像画を飾り、除幕式では感動的なスピーチを行なった。

彼はさらに、大きなモラル・クライシスに耐えなくてはならなかった。大戦終盤のことだった。ロシア軍がヨーロッパに攻め入り、すべてを滅茶苦茶にした。ヨーロッパ各地で赤い旗がはためいていた。

「私は正しかったのだろうか？」マルクスは驚いて、自問した。「労働者階級が権力を手にするのだろうか？資本主義者たちは打ち倒されてしまうのだろうか？最後の資本家は最後の労働者のはらわつで絞首刑に処されてしまうのだろうか？」

彼は昔の自分の理論を実験することにした。もし、それが間違っていたら、自分の間違いを認めて、労働者たちが階級闘争に勝利するための手助けをしよう。

工場のひとつでケリニーニョという見習いが働いていた。ネグロ・ケリノの息子だった。マルクスは彼を実験台にすることにした。

彼を呼んだ。

「ケリニーニョ」

「何でしょうか？」

「私の靴を磨いてくれ」

「はい、社長」

ケリニーニョは笑みを浮かべながら、マルクスの靴を磨いた。

「ケリニーニョ」

「何でしょうか？」

「お前はばか者だ」

「はい、社長」

「このすべてがおまえのものだと言うことがわからないのか？機械はおまえのものだ。おまえが作る家具はおまえのものだ。私が住んでいる豪邸はおまえのものだ。もし望めば、私の娘たちの愛人にだってなれる。未来はおまえのものなのだ」

「はい、社長」

「工場がほしくないか？」

「社長はふざけていらっしゃるんですか？」歯をむき出して、その黒人は言った。

「ばか者、ふざけてなんかいない！」マルクスはどなった。「工場を奪え。それはおまえのものだ！ストを起こせ！バリケードを築け！」

ケリニーニョは黙って、地面を見つめていた。

「おまえはこの世でほかに何が望みだ？」

「ヴィラ・ジャルディン地区に小さな家を建てて、毎週日曜日にサッカーを見に行って、土曜の夜に友だちとカシャッサ⁷を飲むことです。結婚して、そして幸せになることです」

マルクスは毎晩、足の指を数えていた。

「もう6本になったかしら？」夫をからかって妻が聞いていた。その妻も死んだ。マルクスは彼女を記念して基金を設立した。

年をとって、マルクスは気難しくなった。娘のひとりは航空会社の経営者と結婚したが、彼は結婚式に出なかった。もうひとりの娘は会社の帳簿係と駆け落ちしたが、彼は気にもかけなかった。

マルクスの秘密は何だったのだろうか？彼はいつも時流に乗っていた。よく気がついていて、「都会の魅力にひかれて、田舎から出てくるこの人たちが

住む場所が必要になるだろう」そうして、不動産業に身を投じていた。心理学を活用して、「確実性」というものを提供していた。銀行業界の大物たちと親しく、蛇口をひねれば出てくる水のように、いつでも融資が得られた。貸し渋りが起きれば、自分が高利で金を貸していた。

年をとって、マルクスは気難しくなった。大嫌いだったマテ茶を飲むようになった。憂うつそうにボンバ⁸を吸いながら、いつもぶつぶつ文句ばかり言っていた。最近の経営者については「なまけ者め。なまけ者のばか者どもめ。奴らは経済のことを何もわかつちやいない。コンピューターがなければ何もできやしない。ヴィジョンもない。私は分刻みで危機を予見することができたが、コンピューターなんぞ一度も使ったことはないぞ。）、共産主義国については「口うるさい女たちみたいに内輪もめばかりしてる。いつも浪費することしか考えてない」、マテ茶については「ぬるいぞ！ぬるいぞ！」と。

ケリニーニョは工場の事故で死んだ。息を引き取る直前、社長に会いたがり、控えめに最期の祝福を乞うた。

マルクスは強い感銘を受けた。3日後、彼は入院し、左足を切断することになった。彼はその足に防腐処理を施し、盛大な葬儀をあげて埋葬するよう言い張った。名士がそろって葬儀に参列し、困惑した様子で互いに顔を見合わせた。

もう何年も前にマルクスは死んだ。

反左翼デモの最中、怒り狂った群衆によって、防腐処理された足が掘り起こされた。焼かれてしまう前に、そこに6本の指があることに気づいた者がいた。

(終り)

底本：Moacyr Scliar, *os melhores contos de Moacyr Scliar*, São Paulo: Global, 2000.

注

- ¹ モアシル・スクリアルスの略歴については、主に、試訳の底本とブラジル文学アカデミー(Academia Brasileira de Letras)のホームページに記載されている作家紹介を参照した。<http://www.academia.org.br/abl/cgi/cgilua.exe/sys/start.htm?infoid=488&sid=298> (2015/03/03 アクセス)
- ² 19世紀後半から20世紀にかけて、ロシアを中心に行われたユダヤ人に対する集団的で計画的な迫害・虐殺。
- ³ 現トルコのイズミル。
- ⁴ 20世紀初頭、主に、イタリア人、ドイツ人、ポーランド人、ユダヤ人移民によって開拓されたブラジル南部内陸部の都市。
- ⁵ ブラジル最南端のリオ・グランデ・ド・スル州内陸部で、主に農場の家畜を狙った盗賊を厳しく取り締まった警官を指す。つば広の帽子を被っていたため、「つば広」(ポルトガル語で“Abas Largas”)と呼ばれた。
- ⁶ Bento Gonçalves (1788-1847) ブラジル南部出身の軍人。ブラジル帝国から南部の分離独立を求めたファロウピリャの反乱(1835-1845)のリーダー。
- ⁷ サトウキビでつくるブラジルの蒸留酒。大衆的な飲み物として親しまれている。
- ⁸ ポルトガル語で、茶葉を濾すための小さな穴が開いたマテ茶専用の金属製ストローを指す。